

大学入学後の学修に対する適応要因に関する研究①

—適応の変化1年から2年生になって—

山下 八重子, 松岡 みどり

看護学部

【はじめに】昨年度、新入生のリアリティショックについて調査した結果、大学生活での不適応要因は勉強で、学習ストレスを軽減するため援助の必要性が示唆された。対象が大学2年目となり、同様のアンケート調査を行い大学での適応状況について明らかにしたいと考えた。【目的】本学看護学部の2年生1年間の成長を比較し、大学生活への適応状態を明らかにする。【結果】看護学部2年生58名から回答を得た（1年次は68名から回答）。1年次より10名少なかったが、『大学の勉強について』は、“学ぶ分量が多すぎる”“レポートが書けない”“内容が理解できない”という項目が増えていた。2年次となり看護過程の展開など各領域の課題や、アセスメントなど知識を求められる内容に授業形式が変化し、学修の困難感が増したことが要因かと推察する。『体調の変化』では、1年次よりも“不眠”“眠気”など全ての項目で減少していた。友人関係や通学など環境に適応できたことで体調面の安定につながったと考える。【結論】本学の2年生は1年次と比較すると、体調・精神面では安定している。学修面では、1年次より2年次において“学ぶ分量が多すぎる”“レポートが書けない”“内容が理解できない”と学習に対する困難感を持つ学生が増えている現状がある。

看護系大学生の精神的健康パターンと 心理・ライフスタイルの関連性の研究

藤田 智恵子

看護学部

本研究では大学教育における教育指導の在り方を検討する基礎資料を作成することを目的とした。調査対象者は看護系大学学部生3～4年生33名。2016年2月～3月にかけて無記名自記式質問紙法調査を実施。精神健康についてはMHP.1（精神的健康パターン診断検査）を用いた。倫理的配慮としては、所属大学の研究倫理委員会承認を得、同意の得られた者のみを対象者とした。

対象者の平均年齢は21.6歳（SD:±3.94）、男性10名、女性23名。1人暮らしの学生は8名（24.2%）であった。睡眠は平均睡眠時間5.9時間であり、睡眠状態は大変良い～普通28名（84.8%）、悪い～大変悪い5名（15.2%）であった。 χ^2 検定の結果、睡眠良好群と不良群の男女比率には有意差は認められなかった。分析により以下の結果を得た。

1. ストレス不適応群の特性不安・状態不安得点は有意に高く、自己価値観も低かったことから、自信を持ち不安を解消できるような支援の必要性が示唆された。
2. QOL平均得点を基にした2群間では、低QOL群の疲労得点が有意に高く、疲労感が残らないような日常生活環境の調整が課題と考えられた。
3. 同居者有り群の対人緊張得点が有意に高く、学習機会を設けるなど今後の教育課題が残された。